

聖ルカによる福音書第11章1節-21節

於:聖パウロ教会

司祭 山口千寿

「主よ、わたしたちにも祈りを教えてください。」今日の福音書の冒頭で、弟子の一人がイエスさまに願い求めた言葉です。ルカ福音書の特徴の一つは、祈るイエスさまを描いていることです。イエスさまは、その宣教と受難のご生涯の重要な場面で、いつも祈っておられたことをルカは描いています。

このイエスさまの祈りの生活は、弟子たちの関心を引き起こしたに違いありません。イエスさまは、何を祈っておられるのか、どのような祈りを捧げておられるのか、或いは、もっと根本的なこととして、何故、わたしたちは祈らなければならないのか、何故、祈りが必要なのか、そのことを教えてくださいと、弟子の一人が尋ねたのです。

皆さんは毎日、どのように祈りのときを持っておられるでしょうか。朝起きたときに昨夜の暗い間の神さまの見守りを感謝し、新しい今日一日の導きを祈る。そして一日の生活を終えて夜、床につく前に、その日を振り返って懺悔と感謝を捧げる。また3度の食事の前に神さまの養いを感謝する。そのような祈りが身についている方は多いことと思います。

しかし他方、祈ることの意味について、心の中に密かに疑いを抱いている方もあるかもしれません。祈ることをしなくても、毎日の生活は結構うまくやっけて行っているのではないか。満足のいく日々の営みを送ることができるのではないか。祈らなければ生きていけないなど言うことはないのではないか、と内心では思っているということがあるかも知れません。もしそうであるならば、信仰生活とは何であるか、根本的に問い直さなければならないでしょう。

昔、わたしたちの神学校の先生が、「お祈りをしたってギリシャ語ができるようになるわけではないよ」と言ったことがありました。ギリシャ語では苦勞していたのですね。なるほど、そうかも知れません。一生懸命に普段の努力をすることなしに、語学が上達することはないかも知れません。祈って美味しいお料理ができるのなら、台所に立つ前にお祈りが欠かせなくなるでしょう。祈っても祈っても家の中が何時までも片付かないことは、日常的に経験していることです。

それでは、祈っても病気が治るわけではないと言われたら、それを直ちに「その通り」と肯定できるでしょうか。「病は氣から」という諺もあるくらいですから、氣の持ちようによって病気は良くも悪くもなるのだから、祈りによって精神を前向きに持ち続けることで希望が生まれ、病状も良くなるはずだと、祈りの効果を強調する見方もあるでしょう。

もし、祈っても病気が良くなるわけがないとしたら、わたしたちは代禱の中でご病氣の方々を覚えて祈るときに、何を祈っているのでしょうか。特に自分の大切な家族や友人が重い病気にかかって、その回復を祈り求めるのであれば、どのように祈ったら良いかと問うたり、祈りの効用を考える以前に、既に祈っているという現

実があるのではないのでしょうか。

かつて重い病気にかかり、入院し闘病生活をされていた方がありました。何度も、その方を病院にお訪ねしてご一緒にお祈りしたのですが、その方は、わたしのお祈りの言葉が違くとクレームをつけるのです。わたしが一緒に祈ったお祈りは、祈禱書にある「病人の按手」のお祈りでした。その中に、「どうか恵みによって体と心の痛みを取り除き、その病に打ち勝つことができるようにしてください」という言葉がでてきます。その方は、自分は病に打ち勝つのではないとしきりに仰るのです。その病気のためにご自分の死が遠くないことを知って、既に覚悟しているのです。だから病に打ち勝って肉体の生命が更に続くことを求めてはいなかったのです。

この方の場合は、病床で祈ると言うことが何を求めて祈るのか、そんなお話をすることもなかなかできませんでしたので、はっきりとは分かりませんが、おそらく死の恐れから解放されて、悔いなく平安のうちに生涯を閉じることができるよう望んでおられたのだと思います。

イエスさまは、祈ることを教えてくださいという弟子の求めに対して、主の祈りをお教えになりました。わたしたちが礼拝に於いて、或いは個人で祈る際にも用いている主の祈りは、マタイ福音書の主の祈りです。マタイ福音書の方が形が整っているので、礼拝で用いるのにふさわしいと考えられたのでしょう。しかし、マタイ、ルカいずれにせよ主の祈りは、イエスさまにその源を発した祈りであり、わたしたち、つまり教会の祈りであることに変わりはありません。主の祈りによって、わたしたちは何をどのように祈るかを教えられるのです。

ところで、主の祈りはその基本的な組み立てがどのようになっているかを知ることとは、祈りの内容一つ一つを味わうことと同時に大切なことであると思います。

前半はマタイでは3つの祈り、ルカでは2つの祈りからなっています。「御名、御国、御心」が初めに祈られます、ルカでは御心の祈りはありませんが、御国の祈りが発展して御心の祈りとなったと理解することもできるでしょう。「御名、御国」と訳されている言葉は、もともと「あなたの名、あなたの国」と言うことです。「あなた」というのは、父なる神さまです。ですから、主の祈りは、前半で神さまに関わる事柄が祈られているのです。

そして後半においては、「わたしたちの糧、わたしたちの罪の赦し、わたしたちを誘惑から守ってください」と、わたしたち人間についての祈りとなっています。わたしたちが忘れてならないことは、まず初めに、神さまについての祈りがなされ、それから人間の必要についての祈りがなされていることです。

旧約聖書の十戒を思い起こしてください。十戒においても、前半は神さまに関する戒めが置かれていました。第1の戒め「わたしのほかに何ものをも神としてはならない」から始まって、「偶像の禁止、神の名をみだりに唱えてはならない、そして安息日を守ること」の4つの戒めが、前半となっています。

後半は、「父と母とを敬え」から始まって、「殺してはならない、姦淫してはならない、盗んではならない、偽証してはならない、むさぼってはならない」という人間関係についての6つの戒めです。

神さまに関する戒めが初めに置かれているのは、神さまと人間との関係が正しく

されない限り、人間同士の関係もまた正しいものとなることはできないことが示されているのです。それと同様に、主の祈りにおいても、人間の必要が満たされるためには、まず神さまご自身が神さまとして行動され、救いの力を発揮していただき、人間がそのような神さまの前に、自らの有り様が打ち砕かれなければなりません。それが主の祈りの順序となっているのです。

このことはイエスさまの教えの中にも見られることです。先々週の福音書で、良いサマリア人の物語が語られたきっかけを、もう一度思い出して下さい。律法の専門家が「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」とイエスさまに尋ねました。それに対してイエスさまは、逆に、「律法には何と書いてあるか」と質問します。律法学者は正しい答えを返すのですが、その答えは、「第1には神を愛すること、そして第2には隣人を愛すること」でした。それが最大の戒めです。この2つの戒めは別々のものと分けて考えることはできないのです。神さまに関する事柄、神さまと人間との関わりというのは垂直の方向・縦の関係です。人間同士の関係は水平の方向・横の関係です。縦と横の違いはありますが、両者は必ず切り結んで十字架を組みなすのです、それぞれを別々のものとして分けて考えることはできないのです。

そして同時に、この順序を覆すことはできません。神さまを第一として、それに基づいて人と人との関係は成り立つのです。神さまを抜きにして人間関係を語っても、それはこの世を上手に生き抜いていくための生活の知恵かもしれませんが、それ以上のものではありません。

主の祈りにおいても、この神さまと人間の関係、そして人間同士の関係について、そして、覆すことのできないこの順序について触れられている箇所があります。それは、罪の赦しを祈る祈りにおいてです。現在、わたしたちが用いている聖公会とロマ・カトリック教会共通訳では、「わたしたちの罪をおゆるしてください」とまず神さまに赦しを願います。そして、「わたしたちも人をゆるします」と言って、わたしたちは赦されているのだから、赦しの恵みの中に生きているのだから、わたしたちも当然ながら、他の人の罪を赦しますと祈っています。これは、神さまからわたしたちが赦されていることと、わたしたちが他の人を赦すことがコインの表と裏の関係にあることを表明しているのです。この2つの赦しは一体のものであって、切り離すことができないのです。

主の祈りの後半部は、人間の必要についての祈りだと申しました。毎日の糧が必要なことは、誰でも良く分かることです。1食や2食を抜くことがあっても、お腹がペコペコになるくらいで、その後にとらふく食べられるならば、何の問題もありません。しかし本当に食料が得られずにひもじい思いをすれば、パンを求める祈りは切実なものとならざるを得ません。そして、その切実さに今も直面している人たちが、世界の中には沢山いることも忘れてはなりません。

そのパンを求める祈りの後に、「そして」という接続詞で結ばれて赦しのお祈りが続くのです。日本語には訳されていませんが、「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。そして、わたしたちの罪をおゆるしてください」と祈るのです。肉体を維持していく上でパンがなくてはならないように、わたしたちが生きていく上で、赦しが不可欠である。赦しなくては生きてはいけないと告白しているのです。わたしたち

は、その切実さをどこまで受け止めているのでしょうか。そのことを真摯に受け止めるなら、何故、祈らなければならないのか、何故、祈りが必要なのか、その理由も自ずと明らかになるでしょう。

「祈ることを教えてください」という問いは、イエスさまの十字架のみ業を通して示された神さまの慈しみに、即ち、わたしたちの莫大な負い目を赦してくださる神さまの愛に目を向けることを、逆に、わたしたちに促しているのではないのでしょうか。

「主の祈りは、福音全体の要約である」という古代の神学者が言った言葉が伝えられています(テルトゥリアヌス)、この祈りを祈るたびに、わたしたちはイエスさまの贖いのみ業によって生かされていることを覚え、感謝し、主の御名を賛美するものでありたいと思います。